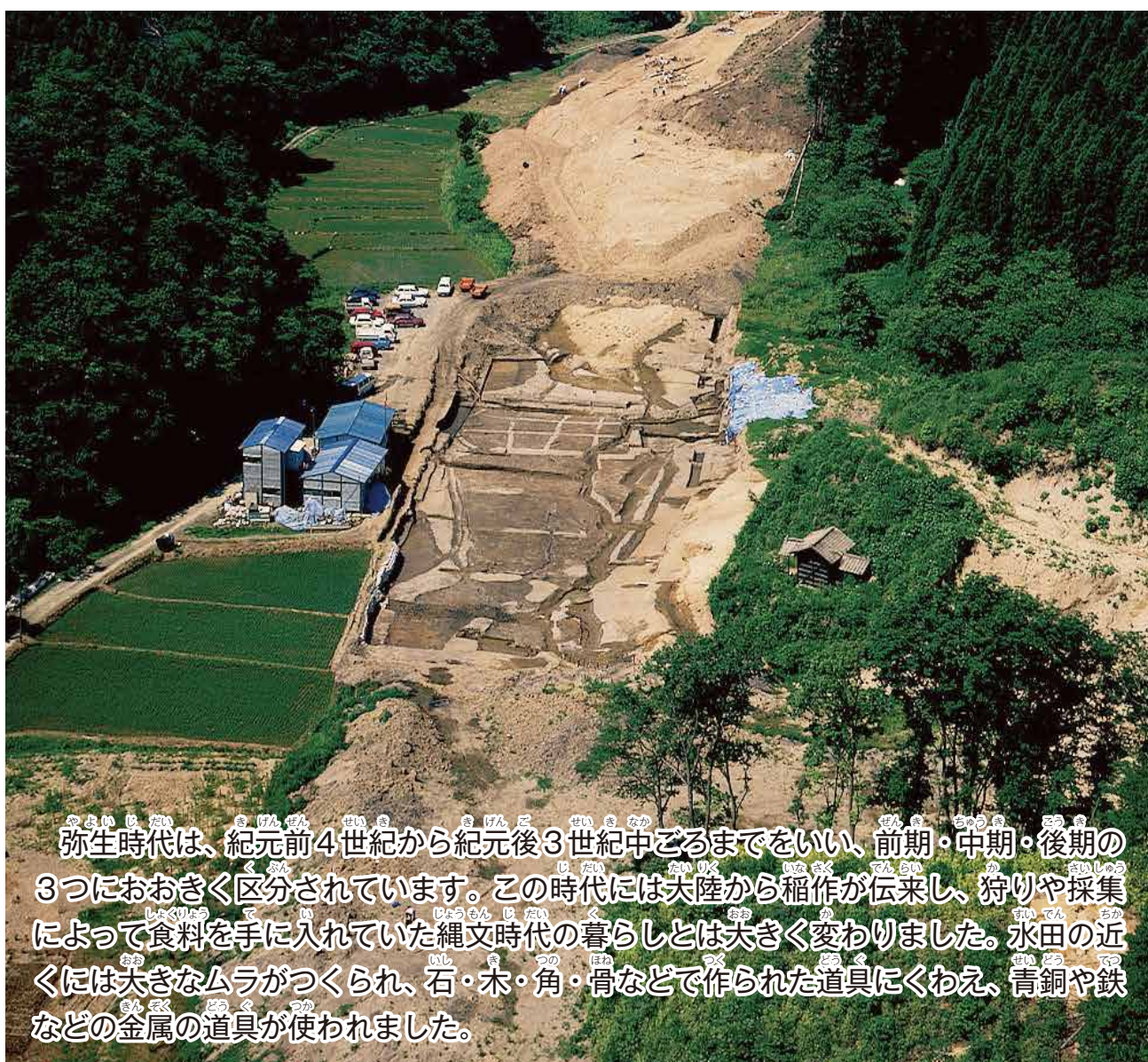


たからものずかん7

や よ い じ だい いわきの弥生時代 I



弥生時代は、紀元前4世紀から紀元後3世紀中ごろまでをいい、前期・中期・後期の3つにおおきく区分されています。この時代には大陸から稲作が伝来し、狩りや採集によって食料を手に入れていた縄文時代の暮らしとは大きく変わりました。水田の近くには大きなムラがつくれ、石・木・角・骨などで作られた道具にくわえ、青銅や鉄などの金属の道具が使われました。

ばんじょうち いせき
番匠地遺跡

2020

こう えき ざい だん ほう じん し きょう いく ぶん か じ ぎょう だん
公益財団法人いわき市教育文化事業団

や よ い じ だい す
弥生時代の住まい

人々は、縄文時代と同じく、地面を掘りくぼめた竪穴住居に暮らしていました。稲作が朝鮮半島から伝わったことで、その管理のため水田の近くにムラを作らくなり、稲を貯蔵する高床式の倉庫なども建てられました。時には、貯蔵された稲や土地をめぐる争いがおきることもありました。そのため、関東地方以西ではムラの周囲に深い堀をめぐることもありました。

みぞ
溝がめぐる竪穴住居跡

中央に炉をもち、周囲に幅1m前後の溝をめぐらせたいわき地方ではめずらしいタイプの住居。

りゅうもん じ い せき
龍門寺遺跡はちまん たい い せき
八幡台遺跡いっ ぺん やく おお がた たて あな じゅう きょ あと
一辺約6mの大型の竪穴住居跡

中央には火を焚いた炉があり、柱の穴も見つかっています。南側の壁沿いには、市内では例のない床面よりやや高いベッド状の高まりが作られていました。ここはムラのリーダー的な人物の住まいと考えられます。

ぼん ぼし ら たて あな じゅう きょ あと
6本柱の竪穴住居跡

6～7世紀ごろに最もにぎわった遺跡ですが、この時代よりもさらに古い弥生時代の終わりごろの竪穴住居1棟が完全な形でみつかっています。直径約4mのほぼ円形です。大小の穴が床面にありますが、とくに大きな柱6個は屋根を直接支えていました。床には、北陸地方の影響をもった文様の付かない甕が見つかります。

おう じ い せき
応時遺跡

コメ作りの始まり

中国大陸から朝鮮半島を経て九州北部へ伝わった稲作技術は、たちまち東北地方の北端まで広がりました。市内ではおよそ2,300年前、畔や水路・水路・堰などの施設を備えた水田によるコメ作りが営まれていました。



市内最古の水田跡

人がいるところは水田跡です。そのわきには大畔や水路がきちんと作られていました。



田んぼの大きさは畳10～12枚ほどの面積がありました。水田跡は合計10～13枚見つかりました。



大畔の土留めとして打ち込まれた矢板

農具



(下段の長さ：8.9cm)

稲の穂先を摘む石庖丁。稲作とともに中国から伝えられました。(龍門寺遺跡)



表



裏

(幅：31.8cm)

水田を耕すときに使う木製の鋤につけられた泥除(未完成品)(連郷B遺跡)



土器の表面にコメ粒の痕が残っていました。

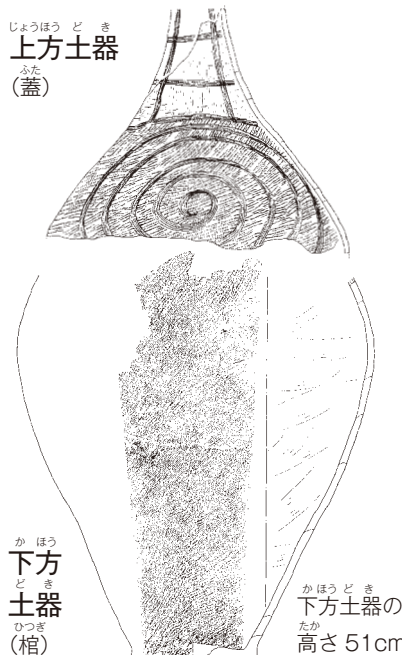
土器の墓とリーダーの墓

弥生時代には、地面を掘って遺体を埋める墓（土坑墓）のほかに、縄文時代にもあったような、土器に遺体を納めた墓（土器棺墓）があります。この時代の終わりころには、塚状の高まりの周囲に溝をめぐらせた周溝墓または墳丘墓が築かれました。こうした墳墓にはムラのリーダー的人物が埋葬されました。これが古墳時代の古墳のもとになったと考えられます。

土器を用いた墓



上野遺跡



土器を胴の部分で割って、上の部分を蓋とし、また別の土器の下の部分を棺として遺体を納め、地面に埋められました。このように土器を使った墓を、「土器棺墓」といいます。

上野遺跡では、蓋と棺はそれぞれ別の土器が使われていました。上方の蓋には壺が使われており、バラバラになった状態で見つかりました。下方の棺には甕が使われ、肩の部分から底部にかけてほぼそのままの形で残っていました。



方形周溝墓の周りや斜面には、これよりも古い時期に300基を超える土坑墓（黒い楕円形）が作られていました。

溝によって方形に区画された墓

1辺約11mで、周りが溝で囲まれています。中央には埋葬のための穴が掘られていました。



弥生時代の始まり (紀元前4世紀～)

弥生土器には縄文時代の名称ともなった縄目の文様をつける習慣がまだ残ります。また、初期の土器の表面には太い棒状の工具によって、漢字の「工」の字に似た文様（工字文、変形工字文）を描いたり、表面を浅く彫りくぼめて粘土の粒を貼りつけたような文様が特徴的にみられます。



つぼ 壺 (高さ 13.8cm)

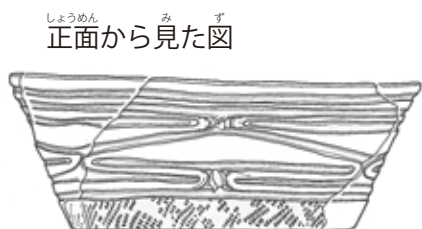


つぼ 壺 (高さ 14.9cm)

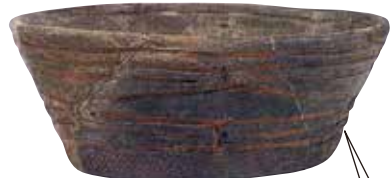


はち 鉢 (高さ 7.9cm)

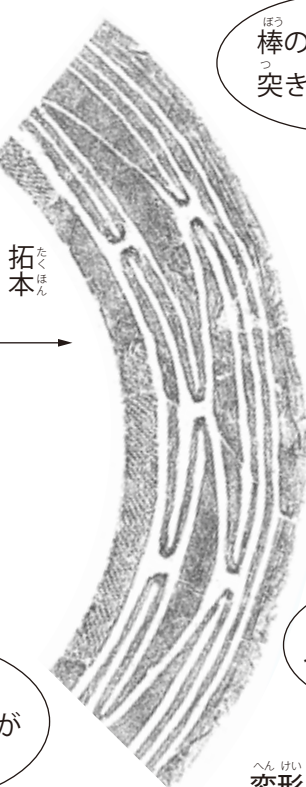
- 稲作が始まる
→ 煮炊き用の甕にくわえ、
貯蔵用の壺が出現する
- 鉄器・青銅器が伝わる



しょうめん 正面から見た図



はち 鉢 (高さ 5.9cm)



拓本

ぼう 棒の先端で
つき刺している

へこ 凹んだ線には
しゅ いろ 朱色の顔料が
ぬ 塗られている

さくび い せき
作B遺跡

へん けい こう じ もん
変形工字文



つぼ 壺 (高さ 49.1cm)

じょうもん
縄文が
つけられている

煤が
付いて
いる

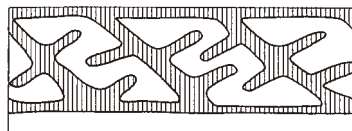
すり けし じょう もん ど き はっ たつ
磨消縄文土器の発達 (紀元前2世紀～1世紀)

中期に入ると、せっかくつけた縄文を磨いて消す技法(磨消縄文)が発達し、それを用いて連続する三角文や「コ」の字文などで土器の表面を飾るようになります。後半以降には、2～5本の工具を束ねて、縦や横の直線や渦巻文・弧文など幾何学的な文様が描かれます。



鉢 (高さ 15cm)

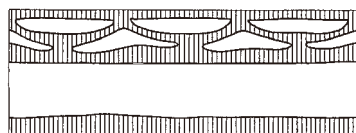
すり けし じょう もん てん かい も しき ず
磨消縄文の転回模式図



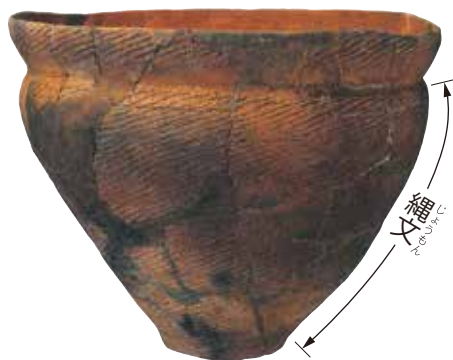
- いわき市でもコメ作りが始まる
- 石庖丁や石斧など磨製石器が普及する
- 遺跡の数がいちだんと増える



高杯 (高さ 11cm)



鉢 (高さ 5cm)



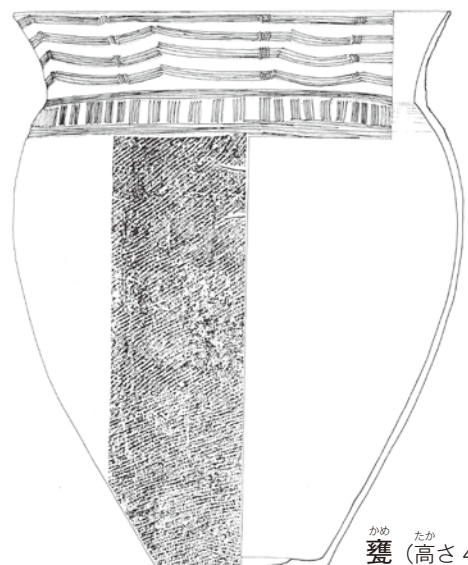
甕 (高さ 31cm)

りゅうもん じ い せき
龍門寺遺跡



壺 (高さ 15.5cm)

うえ の うち い せき
上ノ内遺跡



甕 (高さ 45cm)

あい や い せき
愛谷遺跡

い わ きの 土 器 と 他 地 域 の 土 器 (1 ~ 3 世 紀)

土器の種類は甕・壺が中心となり、口が大きく開いた大型の土器が一般的となります。口縁や頸に貼り付けられた粘土紐の上を棒状工具の先端で突き刺したり、櫛歯状工具で縦・横の区画文が描かれます。また、後期の終わりころには文様をもたない土器が現れるのもこの時期の大きな特徴といえます。

- 石器から鉄製品に変わり始める
- 北関東や北陸地方の影響を受けた土器が出現する
- 墳丘をもつ墓が造られる



茨城県の土器の特徴をもつ壺
(高さ 15cm)

夕日長者遺跡



拡大

壺 (高さ 48cm)

上野遺跡 (採集品)



甕 (高さ 20cm)



北陸地方の土器の特徴をもった
文様のない甕 (高さ 27.9cm)

応時遺跡

いわき市における弥生時代は、コメ作りが開始されたり、これまでになかったタイプの墓が現れたりするなど、新たな文化が取り入れられました。いっぽうでは、土器の文様や生活の一部にはいぜんとして縄文時代の伝統も残していました。当地方の弥生文化は、後期になると次第に北関東や北陸地方をはじめとした他地域との関係のなかで、次の古墳時代へと受け継がれていきます。

用語解説

竪穴住居

地面を円形や方形に掘りくぼめ、その中に複数の柱を建て、部材をつなぎ合わせて骨組みをつくり、その上から土や植物の葉などで屋根をふいた建物。

土坑墓

地面を大人の身長分ほど掘りくぼめた楕円形の墓。大人を納めたと言われている。

土器棺墓

身となる土器の中に遺体を入れ、別の土器で蓋をした墓。子どもを納めたとする考えもある。

墳丘墓

遺体の埋葬場所を土で塚状に高く築いた墓。弥生時代の終わりころには墳丘の規模が一気に大型化し、のちの「古墳」へとつながっていく。

弥生土器

焼く際に土やワラなどを被せて焼くため、縄文土器に比べて薄く、硬く焼ける。

青銅

銅にスズが含まれた合金。いわゆるブロンズ。

工字文

線などによって描かれる「工」の字に似た文様。

変形工字文

工字文を変形させた文様。

拓本

土器の表面を濡らした紙で覆い、墨で叩いて文様の凸凹を写し取ること。

顔料

土器などモノを目立たせるために塗って色をつける材料で、主に自然界の鉱物などをすりつぶして作られる。

磨消縄文

縄文を付けたのちに線で区画し、区画外の縄文を磨り消す装飾技法。先に線で区画し、後で縄文を付ける場合もある。

高杯

高い台の付いた杯形の器。

掲載された遺跡

番匠地遺跡

内郷御厩町字番匠地

龍門寺遺跡

平下荒川字諏訪下

八幡台遺跡

植田町字八幡台

応時遺跡

勿来町大高応時

連郷B遺跡

大久町小久字連郷

平窪諸荷遺跡

平下平窪字諸荷

上野遺跡

好間町北好間字上野

作B遺跡

三和町上永井字作

上ノ内遺跡

勿来町四沢

愛谷遺跡

好間町愛谷

夕日長者遺跡

泉町下川字土木内

